



シロイチモジヨトウの発生と薬剤防除について

シロイチモジヨトウはハスモンヨトウやヨトウガと同類の広食性の害虫で、ネギ、キャベツ、ハクサイ、レタスなどの野菜の他ダイズ、花き類などを加害します。近年はネギを中心とする野菜類で被害の増加する傾向がみられ、問題となっています。

病害虫発生予報9月号（県病害虫防除所）によると、本年8月第5半旬までのフェロモントラップへの総誘殺数は、**つくば市で平年よりやや多い～多くなっており、秋冬ネギやダイズ圃場で発生を確認しています。**

例年、秋にかけて発生が増加しますので、今後の発生に注意して下さい。



シロイチモジヨトウ老齢幼虫とネギ葉の被害
令和5年病害虫発生予報3月号 防除所レポートより

生態と被害

成虫は10～15mmの蛾で、葉裏などに卵を卵塊で産みつけ、ふ化した幼虫は集団で群生して食害します。その後、齢期が進むと分散して葉の食害や葉身の内部に侵入して食害します。

本種の幼虫の特徴としては、**胴部の側面に明瞭な白線があります。**幼虫の体色は、集団で生息する若齢期には黄緑色ですが、中齢期以降は淡緑色から黒褐色など様々で、同じ種類とは思えないほど変異に富みます。老熟幼虫の体長は30mm程度で、ハスモンヨトウやヨトウガよりかなり小さいです。例年、5月頃から成虫の誘引が認められ、9月にピークを迎えます。

防除対策

1. 施設栽培においては、成虫の侵入を防ぐため、開口部に防虫ネットを展張して侵入を阻止します。
2. 圃場をよく観察して、卵塊やふ化直後の幼虫の集団を発見したら、早急に捕殺します。
3. 幼虫の齢期が進むほど薬剤の防除効果が低下する傾向があります。ネギなどでは葉身内に侵入する前の若齢幼虫のうちに薬剤防除を徹底します。
4. 結球する葉菜類では、結球内に幼虫が侵入すると防除が困難になるため、結球始期前後の薬剤防除を徹底します。
5. シロイチモジヨトウを対象とした農薬登録が少ないため、県病害虫防除所が行った**主要薬剤のシロイチモジヨトウ3齢幼虫に対する殺虫効果の試験結果(下記令和5年 病害虫発生予報3月号 防除所レポート)を参考にして下さい。**
6. 薬剤散布の際は、**作物ごとの登録内容や収穫前日数に十分注意**し、薬液が葉裏や株元にも十分かかるよう丁寧に散布します。散布後は防除効果を確認するとともに、薬剤抵抗性の発達を抑制するため、RACコード分類の異なる薬剤でローテーション防除します。

シロイチモジヨトウにおける主要薬剤の殺虫効果について

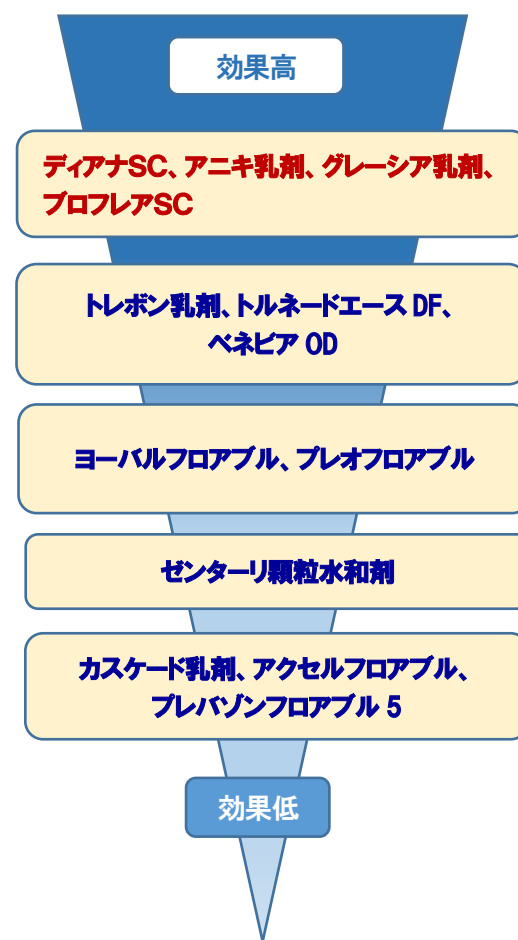
令和5年 病害虫発生予報3月号 防除所レポートより抜粋

https://www.pref.ibaraki.jp/nour/insuisan/nosose/byobo/boujosiidou/yosatsu_joho/documents/yr0503.pdf

令和4年7～8月に県内3地点からシロイチモジヨトウ幼虫を採集し、累代飼育した3齢幼虫を供試した。常用濃度に希釈した13薬剤（下記の結果を参照）の薬液にキャベツ葉片を浸漬して風乾し、それを餌として与え、殺虫効果を判定した。

その結果は、下記のとおり。（下記1～5の順に効果が高かった）

1. **ディアナSC、アニキ乳剤、グレーシア乳剤、プロフレアSCは、いずれの採集地点においても殺虫効果が高かった。**これら4剤は、処理1日後から高い殺虫効果を示し、食害程度も小さかった。
2. **トレボン乳剤、トルネードエースDF、ベネビアODは、いずれの採集地点においても殺虫効果が認められた。**食害程度は処理3日後まではやや増加するが、以降は抑えられた。
3. **ヨーハルフロアブル、プレオフロアブルは、採集地点によって殺虫効果に差が認められた。**殺虫効果の認められた地点では食害程度が抑えられている傾向が見られた。
4. **ゼンターリ顆粒水和剤は採集地点によって殺虫効果に差が認められた。**食害程度は処理日数の経過に伴い、増加する傾向が見られた。
5. **カスケード乳剤、アクセルフロアブル、参考として行ったプレバゾンフロアブル5は、いずれの採集地点においても殺虫効果がやや低い～低く、食害程度も大きかった。**
（試験結果の詳細は、上記病害虫防除所のHP資料を参照してください）



- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 News は J A 全農いばらきホームページでもご覧になれます。